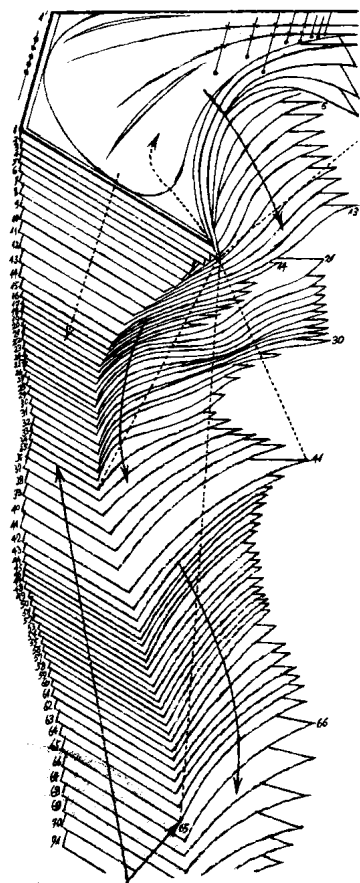


荒正人著作集

第二卷

文学的回想



正人著作集

文学的回想

三一書房

荒正人著作集 第二巻

1984年6月30日 第1版第1刷発行

著 者	荒 正 人
	© 荒静枝 1984年
発 行 者	菊 地 喜 三 次
印 刷 所	株式会社 厚 徳 社
製 本 所	東 京 美 術 紙 工
発行所	株式会社 三 一 書 房
	東京都千代田区神田駿河台2の9
	電 話 03 (291) 3 1 3 1～5 番
	振 替 東 京 9－8 4 1 6 0 番
	郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします Printed in Japan

荒正人著作集 第二卷／文学的回想／目次

I

回想・昭和文学四十年	6
八・一五をめぐる	131

II

『シェイクスピアの悲劇』（ブラッドレー著）	176
『大凶の籤』（武田麟太郎著）	183
『現代文学論』（窪川鶴次郎著）	192
『島崎藤村』（亀井勝一郎著）	200
『近代日本の作家と作品』（片岡良一著）	210
『生々流転』（岡本かの子著）	217
『人間の復活』（島木健作著）	226
『批評と鑑賞』について	235

『国民文学論』に触れて……………	251
私小説作家としての志賀直哉……………	264
歴史文学の主題——『北方の星座』のなかから……………	274
『光の中に』（金史良著）……………	291
作家論の性格……………	294
最初の余計者——『浮雲』の文三について……………	302
等質的地盤……………	318
超克の対象……………	324
暗い谷間の中で……………	331
佐々木基一……………	

荒正人著作集

第二卷／文学的回想

本集に収録するに際して、各作品の漢字は新字体に改め（俗字・宛字は原文のまま）、仮名づかいは引用文以外、現代仮名づかいに統一し（送り仮名は原文のまま）、促音・拗音は小字で表記した。

I

回想・昭和文学四十年

昭和時代は戦争を挟^{はさ}んでいる。戦後に生まれた世代には、戦争時代はむろんのこと、戦前の状況は次第にわからなくなっている。それは、世代から世代へ受け継ぎが、余り十分でないことである。そのため、世代間の意志疎通も、相互理解も閉ざされている。これはお互いに不幸である。たとえ対立や衝突が避けられぬにしても、相手を十分に認識してからでないと、収穫はない。私は、昭和の初めに、たまたま、数え年十五歳で、中学三年生であった。小学校の上級からは徳島で送ったし、それまでも、各地を遍歴したので、自分の郷里しか知らぬということとはなかった。教会を通じて、アメリカの姿も断片的に知った。——文学の世界に入った道筋も、多少変わっていたかもしれぬ。そういう事情から始めて昭和文学四十年の回想を記してみたい。

心に残る教師の一言

葉山嘉樹、イナガキ・タル木知る

「ゆうべは、葉山嘉樹という小説家の『海に生くる人々』を読んだが、船員の生活というのは、随分ひどいもんだね。」

背の低い、顔色の悪い、二十七、八の英語教師が、教室で、突然こんな感想を洩らした。——昭和二年（一九二七）の秋のある日のことであった。私は数え年十五歳、鳥取一中の三年生であった。そのときまで、私は、『海に生くる人々』も、葉山嘉樹も知らなかったが、このことばを聞かされて以来、この作品は、頭に焼きつけられた。『海に生くる人々』を実際、読んだのは、数年たってからだったが、雑誌に載った短編は必ず読むことにした。

この教師は、芥川龍之介などについても教えてくれた。自分の母校が関西学院であることを告げ、その学院からイナガキ・タルホという変わり物の小説家が出ていることも語った。成績が悪くて、落第するところ、こんな学生はいつまでおいても仕方がないからというので、卒業させたのだ。どうだ、いい学校だろう、と静かに笑い、校歌を黒板にかいてみせた。私は、中学生で、『星を売る店』だの『二千一秒物語』を読み、共感を覚えた。

昭和二年は「無産政党」が幾つも結党され、新聞の話題を提供していた。翌年二月二十日、労農党委員長大山郁夫は、日本の進歩的勢力を代表して、香川県から立候補していた。田中内閣の選挙干渉は、幼い中学生をも刺激するほどであった。例の教師は、小さい声で、こう洩らした。

「大山さんが当選するといいいね……」

この教師は、別に左翼というのではなかった。教会にも出入りしていたし、こんな詩も作っていた。

「縷々として雨雲の中帖に悵鬱の重たい烟を吹き上ぐる載貨船の煙突である。」（『自画像破片』）

教師の思い出を語ると、きりが無い。教科書もまた然りである。英語の読本で習った「ノルウェー」という文章も強い印象を与えた。二ページにわたっていたが、その間に、「七姉妹の瀧」という

別刷りの色写真が掲げられていた。数百メートルの断崖に沿って、静かな峽湾フィヨルドに、七筋の滝が落下していた。「ノルウェーは山国で、人々は客扱いがよい」という文句は、今でも英語で覚えてゐる。私は「峽湾」に魅力をかんじた。名作物語で読んだことのある、ビョルンソンの「アルネ」を思い出したりした。将来、必ず行つてみたいという願望をいだいた。——別の教科書には、「ノルマン人のイングランド征服」の決定的瞬間とでもいうべき「ヘイスティングズの戦い」が掲載されていた。これは、一〇六六年十月十四日の朝から夕方までの戦いである。ハロルド二世とギヨーム（ウィリアム王）の戦闘である。前者は、歩兵で、石斧いしおを振り回していたが、後者は、騎馬民族で、弓矢を使いこなしていた。弓矢は前者も持っていたらしいが歩兵と騎馬では、投石デモ隊と機動部隊ほどの違いがあった。

ノルウェーも遠い国であったが、ヘイスチングズの戦いは、はるかに遠かった。両者が、ヴァイキングを通じて結びつくということなど、むしろ、そのころの私にわかるはずもなかった。二つの読本は、それぞれ別の先生から教えられた。最初の若い教師からは、英作文を習った。

私は英作文はきらいだったが、日本語の作文は好きであった。懸賞に応募して、銅メダルをもらつたりした。その一つに「星」というのがあった。後年、ある受験参考書に再録されているのを知った。——あるとき、教師から、小説を読んで、戯曲化せよ、という宿題の出た際、豊島与志雄訳で、『レ・ミゼラブル』の一部を読み、ジャン・ヴァルジャンが銀の燭台を盗む話を、戯曲になおしてみたことがあった。

砂丘で楽しむ空想

新鮮な期待で読んだ藤村の紀行文

鳥取一中は、鳥取市の東北、久松山きゅうしょうさんの麓ふもとにある。鳥取城跡である。学校の一角から、市街が展望できる。樹木が多く、その間から、光沢のある、茶色のかわら屋根が美しい。町中から温泉がわいている点は珍しいが、活気はない。人口は、三万五千ほどであった。

町の北五キロの地点に、例の鳥取砂丘がある。当時は、浜坂砂丘と呼んでいた。現在のように植林などしていなかったし、砂丘は、東西五キロ、南北二キロ、最高点七〇メートルある。場所によっては、砂山しか見えない。小さいオアシスには、松や柳の間に、ぐみの灌木が生え、泉から水があふれ、しばらくは勢いよく流れているが、砂地に吸いこまれ尻しりなし川になる。すりばちと呼ばれる凹地群が十数個もあり、底からは清水がわいているものもある。

砂丘には、いろんな人々が集まる。春は、ぼうふうを摘むために、夏は泳ぐために、秋はピクニックに、冬はスキーをするために集まって来る。

島崎藤村は、昭和二年七月、次男鶏二とともに、大阪朝日新聞社の招きで、山陰地方の旅を試みた。その紀行文は『大阪朝日新聞』（八月三十日―九月十八日）に、鶏二のさし絵入りで連載された。私は、新鮮な期待で、それを読んだ。私は、藤村が鳥取に来る数日まえに、徳島から鳥取に移ったばかりであった。この紀行文に「鳥取の二日」というのがある。藤村は、二日しかいなかったが、小銭屋こぜにやという由緒づかい小さい旅館に泊まった。私は、本屋に行く途中にある、その旅館の前を通りすぎながら、

ここに藤村が泊まったのだなという感慨を覚えた。ただし、藤村の作品はまだ『をさなものがたり』くらいしか読んでいなかった。教科書に採り入れられている詩や断片は別として。さて、藤村は、砂丘について、こうかいている。

「黄ばんだ熱い砂、短い草、さうしたさびしい眺めにも沙漠の中の緑土のやうに松林の見られるところもあつて、炎天高く舞ひあがる一羽の鳶が私達の眼に入つた。砂丘の上からは海も望まれるかと、鶏二が一人で砂の道を踏んで行つた後姿も忘れがたい。」

中学時代の親友の一人前川太郎は、当時、こんな一句を詠んだ。

「焼砂を踏みて海見る浜童」

鳥取を訪れた人、鳥取に住んだ人に、砂丘の印象は忘れ難い。私が敬愛したSという国語教師は、砂丘の秋を歌つた。

「ここにまた生くる人あり晩秋の砂浜の上に落葉拾える」

私もこんな自由律短歌を作つてみた。高等学校にはいつてからである。

「風の中へ 一握りの砂を棄てながら 十月の砂丘に登る」石川啄木から学んだことは言うまでもない。山陰の秋の空は、冷たく澄んでいるが、北国の空にくらべれば、幾らか軟らかである。その空を背景に砂丘の稜線が盛りあがっている。

私は、野外教練のために、砂丘へは何遍となく訪れた。重い装備で、砂の上を歩くのは容易ではない。教練の時間が待ち遠しい。砂丘の頂に立てば、日本海が近くに見える。振り返ると、鳥取の市街のかなたに、中国山脈のゆるやかな起伏が見える。私は、こんな空想を楽しんだ。ここは、新疆省

(ウイグル地区)のタクラマカン砂ばくである。中国山脈は、昆倫山脈^{クンレン}、日本海と見えるの実ははロプノール湖である。こんな子供っぽい空想を通じて、自由の天地を求めた。教練などからのがれたかった。タクラマカン砂ばくは、月の世界に似ている。そういう土地にいるのだと思うと私は、深い孤独感にとらえられる一方では、微妙な自由を所有することができた——少年の日の感傷にすぎぬと思うけれども。

万葉集の世界に憧憬

家持の歌から民俗学に興味いだく

鳥取の冬は、雪に覆われてしまう。

雪が降る前に、みぞれやひさめが降る。冷めたい雨期である。それは、十月の末か、十一月の初めに始まる。海鳴りの音が鈍く重く聞こえてくる。年末か年初に、きまって大雪が降る。一メートル半ほどである。雪の降るのがやんでも曇っている。太陽が見えるのは、月に一、二度しかない。それでも、雪が積もると、なぜか感情がたかまる。——「それは氾濫^{はんらん}した冬の感情である。何処までも奔放に拡っている雪の白さ」これも、高等学校になってからのものだが、そういう感情を表現したものである。

『万葉集』の最後に、こんな歌が掲げられている。大伴家持の作である。

「新しき 年のはじめの はつ春の けふ降る雪の いやしけよごと」

これは、「三年春正月一日於因幡国国庁賜響国郡司等之宴歌一首」という添え書きがついている。

三年というのは、天平宝字三年（七五九）である。因幡国の国庁は、鳥取市から四キロほど離れた地点にあった。たんぼのあぜに、やや高い標柱が立っているだけであつた。私が、学校からの見物で訪れたのは、晩春のころであつたが、雪野のはてにある遺跡を思いだす。おそらく、あの歌からの連想のせいであろう。

私の愛読した次田潤『万葉集新講』（盛美堂書店刊。この出版社は河出書房の前身である）によると、こんな訳が掲げられている。

「新しく迎へた年の初の今日しも、初春のめでたい兆として、降り積つた雪のやうに、吉き事もどし／＼積り重なつてくれ。」さらに簡単な註がついている。「新年に雪が降るのは豊年の兆であるといふ俗信が、既に奈良朝にも行なはれてゐたのである。」

私は、この俗信に興味を覚えた。後年、柳田民俗学に関心を抱くようになったのは、こんな小さい事柄が原因の一つになつていたかもしれない。これは望むほうがむりだが、この註に、文化人類学の立ち場から、雪による占いは、北方シャーマニズムの習慣である、というような註が加えられていたならば、私は、文化人類学に志していたかもしれない。

大伴家持は、藤原一族との抗争に敗れ、悲劇の人になつた。因幡守に左遷されたのは、前年であつた。その年の八月、淳仁天皇の即位の報が伝えられ、藤原家の勝利が確実となつたとき、絶望に陥つた。新天皇は、藤原仲麻呂のあやつり人形にすぎなかつた。仲麻呂対反仲麻呂の権力争いは、毛沢東対実権派に似ている。大伴家持は、劉少奇というところか。この新年賀宴の歌の背後には、孤立無援の心境が秘められている。家持の歌は、これが最後になつたが、かれはまだ二十六年も生き延びて、

数国の国守を勤め、最後は、陸奥^{みちのく}で没した。その際、無謀連坐の理由で、除名処分を受けたという。私は、以上の事実をばく然と知っていた。だから、歌の意味もわかるような気がした。ただし、実際に好きな歌ということになれば、啄木のものであった。

「己が名を仄かに呼びて涙せし十四の春にかへる術なし」

ただし、『万葉集』の世界に、少年らしい憧憬^{どうけい}を抱いたことも否定できない。——級友の小島憲之君は、いま、京都大学で古典文学の講義を行ない、『万葉集』の研究家として名声を博している。彼が古典文学を学ぶようになった動機の一つは、大伴家持と因幡国との因縁にあるかもしれない。

老嬢の悲痛な訴え

サッコ・ヴァンゼッティ事件の興奮

サッコ・ヴァンゼッティ事件は、一九二〇年代のアメリカの恥辱であった。松川事件が注目を浴びた際に、フレーム・アップ^{でっちあげ}の例として、サッコ・ヴァンゼッティ事件が引き合いにだされた。松川事件は、被告たちが無罪になったけれども、サッコ・ヴァンゼッティ事件では、サッコもヴァンゼッティも、最後まで無罪を訴えながら、電気椅子^{いす}に送られた。一九二七年八月二十三日のことである。事件の発端は、一九二〇年の春であるから、八年間も、有罪か無罪かが争われたのであった。アメリカの良心派に属する人びとは、嘆願と抗議を続け、それは国際的な規模にひろがり、最後には、ローマ教皇まで助命運動に乗りだした。サッコとヴァンゼッティが地上から消え去っても、訴えは消えなかった。「サッコ・ヴァンゼッティ事件の真相」という小冊子が、本屋の店頭にならべられていた。私は、

それを読み、異常な興奮に駆られたことを思いだす。それからしばらくして、もう一度意外な訴えを受けた。――

私は十六歳の春、組合教会で、ベネトという宣教師から洗礼を受けていた。そのまえからミス・コーという宣教師のもとに出入りしていた。彼女の住む宣教師館は、ベネトの隣にあった。ベネトは家族とともに住んでいたが、ミス・コーは、六十歳位、いわゆる老嬢であった。

彼女は、ある時、英文パンフレットを取り出し、悲痛な表情で、サッコ・ヴァンゼッティ事件の経過を説明し、どちらの犠牲者か忘れたが、獄中からの手紙を読んでもくれた。花を愛し、小鳥の声に聞き入るといふようなことが述べられていた。ミス・コーは声を強めた。「コンナヤサシイコロヲモッタニンゲンガ、ドウシテヒトゴロシナドデキルデショウカ」――私のかたわらには、福本イズムの福本和夫について語る急進派の青年がいたが、この事件に関しては何も知らなかったらしく、氣まわり悪そうに、少年の私に弁解していた。

ミス・コーは、おなじ手紙を教会の壇上から、会衆に読んで聞かせた。会衆は必ずしも、彼女の期待したような反応は示さなかった。そのあとで氣付いたのだが、彼女のもとには、平和と反戦を呼びかける雑誌や小冊子が幾種類も送られてきた。それにまじって、アンティ・ヴィヴィセクション（動物の生態解剖に反対する運動）の機関誌などもあった。

戦後知ったのだが、彼女は、フィラデルフィアの大きい家具店の娘であったという。その店は現在もあるらしい。バッハが好きで、レコードを聞かせてくれた。黒人靈歌やアメリカの民謡などを一緒に歌わされた。私の音楽趣味は、そこで養われたかと思う。